

令和7年度 兵庫県立阪神特別支援学校 学校評価

重点目標

I つなぐ連携

- I-① 一人一人の多様な教育的ニーズに応じた教育の充実
- I-② 自立と社会参加を見据えたキャリア教育及び進路指導の充実
- I-③ 訪問教育の充実
- I-④ 発達段階に応じた人権教育の推進
- I-⑤ 生徒指導(生活指導)体制の構築
- I-⑥ 教職員の専門性及び授業力の向上

II つながる連携

- II-⑦ 信頼される学校づくり・地域とともに歩む学校づくりの推進
- II-⑧ 交流及び共同学習の推進
- II-⑨ 分教室における教育内容の充実
- II-⑩ 地域における特別支援教育のセンター的機能の充実

A(4):達成している B(3):おおむね達成している C(2):あまり達成していない D(1):達成していない

学部分	学部・分掌目標	具体的方策	評価指標	達成状況	評価	課題と改善方策
小学部	自立と社会参加に向けて、児童一人一人の実態や学習・生活上の課題から目標を設定し、指導や支援の充実を図る。 重点目標 ①②④⑥⑦	(1)保護者、教員が連携して児童の実態を把握し、学習や生活上の課題を明らかにしたうえで、自立と社会参加につながる目標設定やその達成をめざす取組をする。	(1) 自立と社会参加につながる目標を設定し、目標達成に向けた取組ができたか。	(1) 高等部卒業後の進路先から「小学部段階から身につけてほしいこと」を教わり、進路指導部と連携して学部で研修会を開催した。各学年で話し合い、小学部段階からの自立と社会参加を見据えた目標設定や取組を意識するようになってきている。外部専門家活用事業を活かして地域の生涯学習プラザや進路先の事業所等から講師を招き、地域社会につながる活動や卒業後の仕事を体験した。	3.5	(1)自立と社会参加を見据えた目標設定や取組ができるように、進路指導部と連携したり、進路研修会を活用したりして、小学部教員の視野を広げていく。将来の余暇や地域社会につながる外部専門家活用事業の活用は継続できるとよい。
		(2) 支援の手立てを工夫し、児童が自分で選択したり考えたりして行動する場面や自分の思いを伝える場面を設定する。場面の数を増やすだけでなく、その取組が「より主体的」になるよう考える。学年会、クラス会で一人一人に合った「主体的」な取組とは何かを考える。	(2) 児童が主体的に、考えて行動したり、自分の思いや考えを伝えたりする場面の設定ができたか。	(2) 学年会やクラス会で、現在、設定している場面について改めて話し合った。児童の特性、学習進度、興味関心に応じて支援の手立てを工夫し、「より主体的」になるよう考えて、場面の設定ができた。	3.5	(2)引き続き、児童が自分で選択したり考えたりして行動する場面や自分の思いや考えを伝える場面を増やし、その取組が「より主体的」になるように考えていく。将来を見据えた自立と社会参加につながる主体的な取組をする。
		(3) 教員間で児童に関する情報を共有し、PDCAサイクルで定期的な見直しを行い、関係機関との連携や学校内外の専門性のある人材活用も視野に入れながら、日々の指導や支援の充実を図る。	(3) クラス会、学年会、学部会などで児童に関する情報共有を行い、各場面の具体的な配慮や手立ての設定→実践→見直し→改善を行うことで指導や支援の充実を図ることができたか。また、必要に応じて、関係機関と連携したり、学校内外の専門性のある人材を活用したりすることができたか。	(3) 教員間で児童の情報を共有し、目標達成に向けて定期的な見直しや改善を行い、指導や支援の充実を図ることができた。必要に応じて、支援部に相談し、関係機関や保護者と連携することができた。	3.5	(3)保護者とともに児童への指導支援の充実を図り、必要に応じて支援部と連携して児童を支える関係機関とのつながりを強化していく。
中学部	生徒の発達段階と障害特性をふまえ、学習と支援の充実を図り、自立と社会参加に向けた生きる力を養う。 重点目標 ①②④⑥⑦	(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定する。	(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。支援具(絵カード、感覚遊具)やICT機器などを活用し、活動しやすい学習環境を設定できたか。	(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、課題を設定し学習に反映した。支援具(絵カード、感覚遊具)やICT機器などの活用方法を工夫し、活動しやすい学習環境を設定できた。	3.5	(1)授業や日常生活での課題に対して、今後も継続して支援を続けていく。また、特別支援教育の経験が浅い職員への研修等を計画し、学部全体の専門性向上をねらいたい。
		(2) 教師間での情報交換、共有、研修等を通し、子どもへの指導や支援へ反映する。また、必要に応じて支援部を通し関係機関との連携を図る。	(2) 教師間での情報交換、共有、研修等を通し、子どもの持つ特性を十分理解したうえで指導や支援に反映できたか。学年、学部、支援部、学校と情報を共有し、必要に応じて関係機関と連携を図ることができたか。	(2) 各生徒の課題や状況について学年主任を中心に学部会等を利用し情報共有を行い、指導や支援に反映できた。また内容によっては、支援部や生徒指導部と連携し対応について話し合いを進めた。「教室マルチリトメント」を題材にミニ学部研修会を実施し、生徒への対応について振り返る場面を設けた。	3.5	(2)今年度は、分教室や定時制など他校への進学希望について、保護者と丁寧に話し合いを重ねてきた。その結果、最終的には本人が納得のいく進路を選択することができた。次年度も他校(職業コース)への進路を視野に入れている生徒がおり、引き続き丁寧な支援と情報提供を行っていく必要がある。不登校傾向のある生徒への対応について、関係職員間で慎重に情報共有を進め、適切な支援につなげられるよう改善を図っていききたい。
		(3) 卒業後の自立と社会参加に向け、自立活動や作業学習、総合的な学習の時間などを活用し段階的かつ系統性のある活動を計画する。	(3)-1 お互いの人権を意識した関わり方やルールやマナーについて学習する場面を設けることができたか。	(3)-1 各学部学年行事の事前学習の場面で、公共交通機関や施設利用時のルール、社会の一員として主体的に活躍することを見据えた取り組みを実施した。	3.5	(3)-1今回は名刺交換をきっかけに、重度の生徒も尼崎市で活動している人たちと関わることができるよう工夫した。販売活動については、今後も継続して続けていくために、年間予定や時間割を調整し充実した活動にしたい。
		(3)-2 県内、地域の施設、人材を活用した活動を計画し、社会参加に向けた取り組みができたか。	(3)-2 県内、地域の施設、人材を活用した活動を計画し、社会参加に向けた取り組みができたか。	(3)-2 外部専門家活用事業を活かし、尼崎市内で活動されているスポーツインストラクターや講師(さをり織り、昔の遊び)を招聘した。社会参加に向けて、お礼の挨拶や質問など講師と交流する場面を設定した。	3.5	(3)-2今年度は、各学年で外部人材派遣事業を活用し、社会参加に向けた取り組みを実施した。これらの活動は互いを理解し合う場として有効であったと感じている。今後は、より一層交流を深めるための具体的な方法について検討していきたい。
高等部	卒業後の生活を充実したものにするを念頭に、保護者ならびに関係機関との連携を深め、指導支援の充実につなげる。 重点目標 ①②④⑤⑦	(1) 福祉、医療などの関係機関との連携を促進し、包括的な指導や支援に繋げる。	(1) 支援部と連携の上、必要に応じて関係機関との情報共有を行い、指導や支援に活かすことができたか。	(1) 医療・福祉等とのケース会議等を通して、学校、保護者、関係機関との連携を促進し、包括的な指導・支援につなげることができた。	3.5	(1) 支援部との連携を一番の柱として、連携会議やケース会議等を今後もニーズに応じて積極的に実施していきたい。同時に関係機関との連携を要する事例における対応方法を職員間で周知し、情報共有の精度を高めていきたい。
		(2) 卒業後、主体性をもって社会生活を送ることができるようになるために、それぞれの実態に応じて、必要な力を身につける学習を展開する。	(2) 個々の実態に添った形で、主体性の向上を図る取り組みの設定ができていたか。その取り組みの中で主体性を発揮するに至る経験を積み重ねるために、卒業後の生活を見据えた体験的な要素が含まれていたか。	(2) 今年度も継続して外部専門家活用事業を活かし、さをり織りの講師を招聘した。さらに消費者教育・職業ガイダンス等の外部人材出前講座等を活用し、主体性をもって社会生活を送る力を身につけるための経験の場を設定することができた。	3.5	(2) 外部専門家活用事業の活用は維持したい。さらに消費者教育等の出前講座の活用ジャンルを広げることで、生徒の卒業後の生活におけるニーズによりマッチしたものを模索していきたい。さらに校外学習を軸として職業等の各授業をリンクさせ、社会生活を具体的にイメージした活動の充実化を図りたい。
		(3) 卒業後の生活に具体的な見通しをもった上での進路選択を実現するため、担任・保護者と進路指導部の3者の連携を円滑に行う。	(3) 各種懇談および進路説明会等において、進路選択に必要とする情報の提供を行えたか。本人保護者の進路選択におけるニーズを理解した上で、進路指導部との連携を図ることができたか。	(3) 進路説明会を通して卒業後の生活に係る情報提供を行った上で、進路と担任の双方が保護者のニーズを理解するための進路懇談を実施した。そこで図られた共通認識のもと、進路決定へのサポートに務めた。	3.5	(3) 指導する教員側の進路関連の知識をより深め、卒業後の生活を見据えた系統的な指導支援および保護者との連携を行えるように取り組むたい。また、進路指導部との連携を引き続き促進し、生徒・保護者への情報提供等の取組を積極的に行う。
分教室	インクルーシブな学校運営をめざし、高等学校等との交流及び共同学習や地域との連携を推進し、生徒一人一人の社会自立と職業自立に向けた指導の充実につなげる。 重点目標 ①②⑦⑧⑨	(1) 生徒の社会性を養うとともに、様々な人々と協力し合って生きていく力の育成を目指し、武庫荘総合高等学校との日常的な交流および共同学習を推進する。	(1) 武庫荘総合高等学校との交流及び共同学習について、高等学校に配置されたカリキュラム・マネージャーとの連携や担当者間での連携を密にし、日常的な交流授業や充実した行事の展開につなげることができたか。	(1) 実施する交流授業における担当者間での連携に加え、月に2回程度カリキュラム・マネージャーと会議を行い、交流授業について継続的に協議を実施した。2学年の総合的な探究の時間での交流においては、昨年度に引き続き、分教室の授業に数名の高校生が参加する『分教室協働ゼミ』の他、武庫荘総合高校の『地域活動ゼミ』『社会課題ゼミ』に分教室生が分かれて参加する形態を取り、幅広く交流の機会を設定することができた。また、今年度より2学年が高校の工業実習の授業に前期の期間週4時間参加、家庭科の調理実習で4時間交流を実施した。1学年では、福祉探求科と4時間の交流、3学年では、高校の『表現メディアの編集と表現』の授業に6月～10月に全18時間参加するなど新たな交流の機会を多く設定し、より日常的な交流につなげることができた。行事での交流においても担当者間で連携を深め、充実した取組ができた。	3.5	(1)今年度、高等学校に配置されたカリキュラム・マネージャーと連携し、新たな交流機会を設定することができた。来年度は、今年度の取組を踏まえ、長期的な交流となるよう交流機会を整理するとともに、内容の充実を目指す。また、カリキュラム・マネージャーの配置は来年度までの予定のため、再来年度以降も交流及び共同学習が円滑に進められるように体制の整備を実施する。
		(2) 生徒の卒業後の社会生活及び職業生活に焦点を当て、生徒の地域活動の場の充実を目指し、地域の方々や諸機関との継続的、組織的な連携及び協働の取組を推進する。	(2) 地域と連携、協働する取組において、生徒が主体となって進める活動や武庫荘総合高校の生徒と共同で進める活動等、内容の充実を図るとともに、活動実施回数の増加につなげることができたか。	(2) 喫茶サービスの授業において、5月から2月末までの間、校門前の時友団地集会所にて計23回出張喫茶を実施した。昨年度に引き続き、10月に実施された『第54回尼崎市民まつり』『第21回武庫まつり』に参画した。武庫まつりにおいては、実行委員会に所属するとともに、前日準備や当日の会場整備、高校との『地域活動ゼミ』生徒によるイベントブースの運営のボランティア活動を設定した。また、11月に実施された『エコあまフェスタ2025』に初参画し、コーヒータクアウト販売及び手作りクッキーの販売活動を実施した。さらに、尼崎市社会福祉協議会が主催する『落語のついで』において、運営役員の方と協働し、受付や会場誘導等の運営ボランティアを実施した。地域活動の実施回数を増やすとともに、各活動において地域の各部署と連携し、取組を充実させることができた。	3.6	(2)来年度も引き続き、出張喫茶の実施、地域のイベントへの参加を行う。今年度の『エコあまフェスタ』と同様に、生徒が地域で活躍できる機会を新たに探りつつ、持続可能な活動となるよう取組を整理していく。武庫荘総合高校と協働での地域活動を一定実施することができた。来年度も地域の諸機関との連携を深め、取組の充実を図っていく。
訪問学級	各学部の目標に準じて、様々な障害の状況や発達段階、特性に応じた指導の手立て・合理的配慮を設定し、授業の充実を図る。 重点目標 ①③⑥⑧	(1) 実態把握や学びの履歴に基づき、本人の興味・関心を広げる授業づくりを行う。	(1) 成育歴や身体状況の踏まえ、実態把握を的確に行い、教材を工夫しながら本人からの表出を引き出すことができたか。学習経過を踏まえ、学びを積み重ねることができたか。	(1) 感覚を活かした教材の提示や言葉かけを行うことで、目元・口元・上肢の動きでの表出を広げることができた。また、生徒の好みや随意的な動きを活かしながら授業に取り組むことで、より表出を引き出すことができた。	3.6	(1)今後の在籍者は新転入生となるため、より丁寧な実態把握が必要となる。児童生徒の体調や覚醒状態、好きなものや得意なことなどを知り、教師との関係性を構築しつつ、表出の意味づけや客観性、随意/不随意の判断などを行うようとする。
		(2) 本人の思いや願いを中心に、保護者や関係機関と連携を図りながら、一人一人に応じた指導内容や指導方法を工夫する。	(2) それぞれの状態に応じた具体的な配慮や手立てを設定し、指導や支援の充実を図ることができたか。	(2) 保護者と情報共有し、本人の興味・関心に応じて教材や授業の展開を変更しながら、指導支援を行うことができた。また、セラピストと共通理解した内容を、授業づくりや支援方法に活かすことができた。	3.6	(2)丁寧な関わりを通じた信頼関係の形成に努める。児童生徒の人間関係・経験の拡がりを保証するため、感染対策を十分に行いながら、同行訪問など多くの人と関わる機会を設定するための校内体制の構築が望まれる。

令和7年度 兵庫県立阪神特別支援学校 学校評価

重点目標

I  
つ  
な  
ぐ  
連  
携

- I-① 一人一人の多様な教育的ニーズに応じた教育の充実
- I-② 自立と社会参加を見据えたキャリア教育及び進路指導の充実
- I-③ 訪問教育の充実
- I-④ 発達段階に応じた人権教育の推進
- I-⑤ 生徒指導(生活指導)体制の構築
- I-⑥ 教職員の専門性及び授業力の向上

II  
つ  
な  
が  
る  
連  
携

- II-⑦ 信頼される学校づくり・地域とともに歩む学校づくりの推進
- II-⑧ 交流及び共同学習の推進
- II-⑨ 分教室における教育内容の充実
- II-⑩ 地域における特別支援教育のセンター的機能の充実

A(4):達成している B(3):おおむね達成している C(2):あまり達成していない D(1):達成していない

学部分掌	学部・分掌目標	具体的方策	評価指標	達成状況	評価	課題と改善方策
教務部	(1)教育活動全体を通して、個別の指導計画などを活用し、授業づくりや指導の充実を図る。 (2)新様式の個別の指導計画(3年目)、統合型校務支援システムによる指導要録の運用状況の考察を継続する。 重点目標 ①⑥	(1)個別の指導計画の運用に必要な「3観点の評価基準」などの周知や各教科等の指導方法を工夫できるよう年度当初の着任者研修や全校研修の内容を精査する。 (2)マニュアルの改訂と学部・学年へ適時のフォローを行う。	(1)個別の指導計画を活かした授業づくりができたか。 (2)運用にあたり、学部・学年へ適時(実施前)の情報提供ができたか。	(1)夏季に実施した全体研修会では、個別の指導計画作成の参考となる「発達段階に応じた手だて」について講話を受け、個別の指導計画の作成や授業改善に結び付けることができた。 (2)3年目に入り、前年度と比較してマニュアルに基づく運用がより実施できた。前年度から改訂されたマニュアルの該当箇所について、学部会・学年会などの場を活用し、適宜連絡・説明を行うことで円滑に行うことができた。	3.5 3.5	(1)研修で得た学びを継続的に教育活動へ生かすため、授業実践の事例共有やフォローアップ研修を進める。また、個別の指導計画については、定期的に指導内容や目標を振り返り、児童生徒の変化に応じて見直すとともに、授業での子どもの学びや指導の過程を評価に生かし、指導と評価がつながった授業改善を進めていく。 (2)今後も引き続き、マニュアルを基にした運用を全体で行うとともに、改訂箇所や留意点については、学部会・学年会等の機会を活用した随時の情報提供を行う。これにより、変更内容の確実な共有と理解を図り、より円滑で統一的な運用を目指す。
	(1)「自立活動とICT～児童生徒が主体的に取り組める活動～」のテーマを基に、学部学年研や公開授業等の授業研究を通して、教員の授業力の向上を図る。 (2)適切な実態把握に基づいた自立活動の指導を行うために、専門性向上のための情報発信や仕組みづくりを行う。 重点目標 ①⑥⑧	(1)1 学部学年研を行い、児童生徒の主体的な活動を促すには、ICT機器を使用することが必要か、どのようなICT機器を使用することが効果的であるかなど、意見交換と情報共有の機会を設ける。 (1)-2ICTの活用に関する校内全体研修会を実施し、講師には本校の見学をして頂くことで本校の児童生徒の実態に合うICT機器の活用例などを紹介して頂く機会を設ける。 (2)-1 昨年度好評だった「自立活動チェックシート」を継続して活用することで児童生徒の実態把握について教員間で相談しながら、個別の指導計画の目標や課題・指導について多角的な視点で協議する機会を設ける。 (2)-2 Teamsを活用し、自立活動に関する情報を発信する。また、自主研修会を開催し、研修の機会を設ける。	(1)-1(1)-2「自立活動とICT～児童生徒が主体的に取り組める活動～」の視点から「適切な課題か」「学習者同士、教師と学習者間コミュニケーション場面設定できたか」「将来を見据えた視点を取り入れているか」「学習効果はあるか」「適切なICTツールの選択ができているか」「主体的な児童生徒の取組はどの部分に見受けられたか」を教員間で共有できて授業づくりができたか。 (2)-1 児童生徒の全体像を捉えつつ、それぞれの実態把握や優先順位の高い課題の設定・指導ができたか。また、学部学年研などで、「自立活動チェックシート」の活用方法を周知できたか、利用を促すことができたか。 (2)-2 児童生徒への指導や支援に有益な情報を発信することができたか。また、教職員は情報発信を閲覧する回数や「いいね」等の反応が昨年度に比べて増えたか。	(1)-1(1)-2公開授業では、児童生徒の実態に応じた課題を設定し、ICTを活用した主体的な活動や学習者同士・教師とのコミュニケーションが見られた。授業後には意見交換や振り返りを行い、教材や授業づくりについて教員間で共有することで、学習効果や将来を見据えた視点を確認し、授業改善の方向性を深めることができた。 (2)-1 学部学年研究の初回に、全学年を対象として、自立活動チェックシートの活用方法を動画やワークを通して周知し、実際に活用する場面を増やすことができた。 (2)-2 月に一度程度の頻度で、各部署がTeamsを活用して情報発信を行ったり、職員のニーズに応じた自主研修会を実施したりすることができた。閲覧回数や職員からのレスポンスも昨年度より増えた。	3.6 3.5 3.5	(1)-1(1)-2 ICTでの研究活動が3年間行われ、来年度、校内研究テーマを変更する。引き続き学部学年研や公開授業を活性化させて授業研究を行うと共に、指導案や実践報告書の簡素化も推進する。 (2)-1 客観的指標の一つとしてより浸透、活用できるよう、引き続き周知していく。 (2)-2 自主研修会は放課後に会議のない、または参加メンバーが少ない会議の日に設定するが、そもそも会議設定のない日が少なく、かつ学年の作業や打ち合わせと重なることも多い。動画でTeams共有するなどして、時間と場所に関係なく勉強できるようにするなどの工夫が必要となる。
総務部	災害から児童生徒の命を守るため、実践的な防災教育の推進を図る。児童生徒が安心・安全な学校生活が送れるよう、教職員対象の防災教育・不審者対応等の研修の推進を図る。 重点目標 ⑥⑦	(1) 個々の児童生徒の実態に応じた避難誘導、安全に状況判断をする訓練を行う。 (2) 警察署・消防署・専門家等による防災教育、災害時の対応等に関する研修を行う。	(1) 防災訓練時に、児童生徒と自身の安全を確保して避難経路を決定し、他の教員と協力しながら避難誘導できたか。避難先での過ごし方を想定した事前準備の意識づけができたか。 (2) 不審者侵入、災害等の非常時の対応、さすまたや消火器の扱い方等についての知識や技能を習得することができたか。	(1)防災訓練時には安全を確保し、他の教員と協力しながら避難誘導ができた。しかし、事前準備については児童生徒のための準備に注力するあまり、教員自身の事前準備には課題が残った。 (2)不審者対応研修会では警察署員から不審者への対応方法やさすまたの扱い方等についての助言を受けた。消火器の扱い方については、消防署員による実演等を通して確認することができた。	3.4 3.5	(1)洪水避難訓練では教員自身の避難準備が不十分だった。次年度は職員会議での実施要項説明時に教員の避難準備についても触れる。当日の職員連絡でも再度確認する。 (2)不審者対応研修会では、警察署員から初期対応についての課題が指摘された。次年度の研修は初期対応について計画する。
	(1) 特別支援教育の実践に資する校内支援の充実を図る。 (2)地域における特別支援教育のセンター的機能の充実を図る。 重点目標 ①⑥⑩	(1) 教員の実践力向上のための機能として各学部支援部員のコンサルテーション能力を高める。 (2)尼崎市保育管理課や尼崎市教育委員会等の関係機関との連携を図り、早期支援から発達に合わせた相談活動を実施する。	(1)児童生徒との関わりや授業について、学年会やその他の機会に情報共有の促進を図ったり、支援についての相互理解を深めたりすることができたか。 (2) 就学前後の幼児・児童の適切なアセスメントを行うことができたか。保育士や教師とのコンサルテーションでより有効な支援や手立てを提供できたか。	(1)支援部員から相談を受け、専任部員の場面観察から実態把握や支援方法を協議し、その内容を学年等に共有できた。より有効にするために以後3か年で継続目標とする。 (2)地域支援としての相談支援活動は件数を増やすことができ、就学前の幼児や小学校の児童に対する実態把握や適切な支援方法を紹介できた。	3.6 3.6	(1)教師の専門性を高めるためにも、教師同士の協働性を機能させる。そのために校内相談で協議した情報を支援部員が関係教師に共有する機会を今後も継続して設けていく。 (2)就学前や小学校段階では、今ここでの困り感に対応しながら、その後の就学や進路についても関連させて、各施設が長期的な支援計画を持って助言する。
進路指導部	児童生徒が自己の希望する進路について関心を高めることができるよう、適切な情報提供を行う。校内でのキャリア教育の推進を図る。 重点目標 ②⑥⑦	(1) ハローワーク、就労支援機関、保健福祉センター、福祉事業所など、関係機関と連携し、最新の情報を提供できるよう職場開拓や進路指導を行う。 (2) 卒業後の進路を見据え、キャリア教育発達段階表の活用や、小・中・高で一貫したキャリア教育が行えるようにする。	(1) 児童生徒の実態や事業所に応じた、情報提供を行えたか。関係機関と連携し、適切な進路指導を行えたか。 (2) 卒業後の進路先の情報を知ることができたか。キャリア教育発達段階表を活用できたか。小・中・高で一貫したキャリア教育が行えたか。	(1)各種関係機関を訪問して話を聞くなど、情報共有を行い、懇談や連絡帳等で保護者に情報提供し、進路指導を進めることができた。 (2)キャリア教育研修会において、卒業後の進路先の情報(福祉サービスの種類や活動内容)を提供することができた。また、キャリア教育発達段階表を活用し、各学部で生徒のキャリア形成を検討し、今後の学校生活に生かすことができた。	3.6 3.5	(1)事業所が求めていることを学校と家庭とで共有することで進路実現のミスマッチとならないよう進めることが必要である。そのために、事業所に関して(福祉サービスの種類など)、多くの方知ってもらう機会が必要である。引き続き、パンフレット等を積極的に活用し、情報提供に努める。 (2)キャリア教育発達段階表を教員に周知していくために年度当初から活用していける機会をつくる必要がある。
	児童生徒の実態や障害特性に応じた指導を行うための指導体制の構築及び適切な申し合わせ事項運用の充実を図る。 重点目標 ③④⑦	(1) 児童生徒一人一人の背景や障害特性への理解や促進を中心に据え、学部・担任及び特別支援教育コーディネーター等との密な連携を図る。 (2)各種研修等を通じて職員間の理解啓発を図り、生徒一人一人に合わせた指導を行う。	(1) 各種会議や指導の場面において、一人一人の背景及び障害特性等について、適切な情報共有ができていくか。心情や精神状態を踏まえて指導が行えているかどうか。 (2) 指導上の申し合わせ事項が、あくまで指導上のガイドラインであることを職員間で共通理解ができていくか。	(1)指導が必要な場面において、障害特性を踏まえた指導を心掛け、情報共有を行いつつ指導を行うことができた。関連部署との連携において、指導の背景に家庭を含めた支援が必要な場合は、適切な部署と連携して指導・支援を行うことができた。 (2)年度当初の研修や、分掌部会において指導上の留意点を確認して、指導にあたることができた。また、県主催の研修等で得た情報を分掌部会において共有し、事業への対応やポイントを含めて本校に合致するように検討することができた。	3.5 3.5	(1)生徒からの聞き取りの状況を踏まえ、重大事案やその他支援部との連携が必要であると考えられるケースについては積極的に関与していければ良かった。学校上での生徒指導と家庭支援については、密接に関わりがあるため、連携をスムーズにするためにもしっかりと把握し生徒指導に活かしていくよう努める。 (2) 研修時に相關図とともに、具体的なイメージの湧く指導に関しての図などを提示することができれば理解も進んだと考える。今後も引き続き研修等を行い、職員の指導上の留意点について周囲との連携を踏まえて伝えていく。
保健部	「安全管理」の意識を高め、児童生徒が安心安全に活動を送れるようにするために、保健管理体制の充実を図る。 重点目標①⑦	(1)服薬に関する介助体制や管理体制について働きかけ、事故の防止や安全に対する意識を高める。 (2)食物アレルギーや薬と飲み合わせが悪い食材がある児童生徒について周知徹底し、エビベン対応に関するスキルの習得やアレルギーへの危機管理を各々が持てるよう、安全な環境づくりを整える。	(1)服薬に関する手順や体制について、周知や理解を深めることができたか。教室での管理体制や、服薬介助表の提出状況に変化があったか。 (2)食物アレルギーや食について配慮が必要な児童生徒についての周知や理解を深めることができたか。エビベンの正しい知識を習得したり、アレルギーへの予防ができるような安全な体制づくりを整えられたか。	(1)服薬手順について、マニュアルに沿ってガールーンや学年会等の場で周知を図った。服薬介助表の呼びかけを行ったことにより、提出率が大幅に増えた。夏の研修で、危機管理への意識を備えられたことにより、一人一人が事故防止への意識を再度改めた。 (2)年度初めに、職員会議や研修の場を設け実態への理解を仰いだ。エビベンやプログラムに関する研修を新たに設け、牛乳パックの扱い方に関するマニュアルも作成した。引き続き、安全に過ごせる環境整備を進めていく。	3.6 3.6	(1) 研修や日頃からの周知を行い、服薬に関する管理体制への意識が高まりつつあるが、依然として事故報告が上がっている。転倒に関する事故が多いため、もう一度児童生徒の動線を考えて未然に防げるよう意識づけを図ることが課題である。今年度と同様、緊急時のみならず日ごろの危機管理への意識に関する研修等を引き続き行う。 (2) 今年度よりエビベンを必要とする児童が在籍したことに伴い、今まで以上にアレルギーへの危機意識を周知徹底した。だが、各学年へのアレルギー調査では周知度が低い部分も見られる。引き続き、在籍学年のみならず学校全体でも周知度を高められるよう呼びかけが必要である。
	授業や校務でノートPC、iPad、電子黒板などのICT機器を安全かつ効果的に活用できるよう教職員の情報セキュリティ意識の向上やICT機器の整備や機器活用能力の向上を図る。 重点目標①⑥	(1) iPadを中心としたICT機器等の基本的な操作やICTを効果的に教育に活用する方法の習得を図るため、計画的に校内研修を実施する。 (2) 職員会議などで、情報セキュリティに関するミニ研修会を行い、教職員の情報セキュリティ意識の向上を図る。 (3) 校務や授業等で安心・安全に活用できるように適切に児童生徒・教師のiPadや新しい電子黒板などのICT機器を適切に管理する。	(1) 計画的に研修会を企画・実施することで、教員のICT機器活用指導力の向上を図ることができたか。 (2) 情報セキュリティを守り、日常的な業務が行えるように職員会議後のミニ研修会を計画的に行うことができたか。 (3) 教師児童生徒用iPadの管理簿を作成し、適切に管理できたか。児童生徒用iPadはMDMで登録し、情報セキュリティをしっかりと守り適切に管理できたか。新しくなった電子黒板の配置図を作成し、適切に管理できたか。	(1)職員会議後ICTに関するミニ研修会を都度行うことで、教員のICT機器活用指導力だけでなく、校務に関するICT活用能力を向上することができた。 (2)情報セキュリティに関するミニ研修会を夏休み前に行い、情報セキュリティを守り、日常業務を行うことができた。情報セキュリティ監査も問題なかった。 (3) 教師児童生徒用iPadの管理簿を作成し、適切に管理することができた。児童生徒用iPadはMDMで登録し、情報セキュリティをしっかりと守り適切に管理できた。新しくなった電子黒板の配置図を作成し、適切に管理できた。	3.7 3.6 3.6	(1)iPadや電子黒板が日進月歩で日々進化していくので、それについていくための研修の用意が大変であった。最近では生成AIという技術も新たに加わり、こういったものを校務や教育で使えるようにまた研修が必要である。 (2)新たに生成AIという技術が一般社会にも浸透し、それに伴う生成AIに個人情報を学習させない情報セキュリティや情報モラルの習得といったことも今後必要となってくる。 (3)引き続きiPadや電子黒板を適切に管理していく。電子黒板のケーブル類やタッチペン類が紛失しやすいので、適宜注意喚起を行う。